芦屋室内合奏団
ASHIYA CHAMBER ORCHESTRA

第46回定期演奏会
The 46th Regular Concert

みつなかホール
Mitsunaka Hall

平成24年10月6日（土）
Saturday, 6 October, 2012

開場 午後1時30分　開演 午後2時
Opening at 1:30 p.m. Beginning at 2 p.m.

ごあいさつ

1965年に芦屋市浜町の橋本邸で発足した当団も、お蔭様で本日第46回目の定期演奏会を迎えました。永年に亘り、変わらず当団を暖かく見守っていただいておりますご来場の皆様方に、厚くお礼申し上げます。

さて今回はバロック、古典派を中心に皆様に比較的なじみの深い弦楽器だけの曲を選んでみました。特に注目すべきは、将来を期待されている弱冠14歳のヴァイオリニスト吉田南さんをソリストにお迎えすることです。団員一同気持ちだけでも若返って、世代の違いを感じさせない息の合った演奏をしたいと思います。

芸術の秋にふさわしい午後のひと時、古きよきヨーロッパの調べをお楽しみください。

2012年 10月　芦屋室内合奏団　団長 青柳 良
団 員 一 同

プログラム　PROGRAM

F. J. ハイドン　弦楽四重奏曲　作品1−1　(弦楽合奏版)
F.J. Haydn　String Quartet Op.1−1 Arranged for String Ensemble

Ⅰ Presto　Ⅱ Menuetto　Ⅲ Adagio　Ⅳ Menuetto　Ⅴ Presto

A. ヴィヴァルディ　ヴァイオリン協奏曲「四季」より〈秋〉〈冬〉
A. Vivaldi　Violin Concerto　Op.8−3　L'autunno
Ⅰ Allegro−Allegro assai　Ⅱ Adagio molto　Ⅲ Allegro

Violin Concerto　Op.8−4　L'inverno
Ⅰ Allegro non molto　Ⅱ Largo　Ⅲ Allegro−Lento

ヴァイオリン独奏　吉田 南　Violin Solo　Minami Yoshida

♪　**休　憩**　Intermission　♪

W. A. モーツァルト　ディヴェルティメント 第3番　KV 138
W.A. Mozart　Divertimento　No.3　KV 138

Ⅰ Allegro　Ⅱ Andante　Ⅲ Presto

O. レスピーギ　「リュートのための古風な舞曲とアリア」　第3組曲
O. Respighi　Antiche Danze ed Arie per Liuto　Terzo Serie

Ⅰ Italiana　Ⅱ Arie di Corte　Ⅲ Siciliana　Ⅳ Passacaglia

指揮　酒井 睦雄　　演奏　芦屋室内合奏団
Ashiya Chamber Orchestra Conducted by Mutsuo Sakai

曲目解説

■ F. J. ハイドン　弦楽四重奏曲　作品 1−1 （弦楽合奏版）

６曲からなる作品１は弦楽四重奏曲集として出版されたが、本来の原題はディヴェルティメントで急〜メヌエット〜緩〜メヌエット〜急という５楽章形式になっており、コントラバスを加えて演奏することができる。ハイドンが 25 歳の頃の作品で明るく素朴で、純粋なハイドンの魅力に満ちている。

第１楽章（プレスト）　軽快ではずむようなリズムがハイドンらしく４声の対話が心地よい
第２楽章（メヌエット）優雅で踊るようなメロディと中間部のかけ合いは微笑ましい
第３楽章（アダージョ）恍惚とした序奏に続き清爽な中にも美しいメロディが続く
第４楽章（メヌエット）快活で明るい舞曲であるが時折愁いのあるメロディが顔を出す
第５楽章（プレスト）　生き生きとして健康的であり楽しいフィナーレである

■ A. ヴィヴァルディ　ヴァイオリン協奏曲 「四季」より〈秋〉〈冬〉

「和声と創意への試み」作品８（全 12 曲）という協奏曲集の中の第１番から第４番をセットにして有名な「四季」と呼ばれている。楽譜にはソネット（十四行詩）が書かれて、季節の情景や情感を表現した描写的音楽である。春の到来を喜び、夏はけだるく暑く、秋の収穫祭が終わると、雪の寒さに震える冬がやってくる。即興的な独奏ヴァイオリンが、素朴な中にも美しく技巧を駆使して堂々と表現する。四季の移り変わりが、絶え間ない生命力の源泉である事を感じさせる名曲である。

ヴァイオリン協奏曲第３番「秋」　（以下ソネット抜粋）
第１楽章　村人は踊りと歌で豊かな収穫の喜びを祝いバッカスの酒を楽しみついには眠りに落ちる
第２楽章　踊りと歌が終わった後のおだやかで心地良く澄んだ空気は甘い眠りと憩いに誘う
第３楽章　夜が明けると村人は角笛と銃を持ち犬を連れて狩りに出かけ獣は追い詰められる

ヴァイオリン協奏曲第４番「冬」
第１楽章　冷たい雪の中でふるえ激しい風の中で足踏みをするが寒さのため歯の根もかみ合わない
第２楽章　外では雨が降っているが、暖炉で暖かい部屋の中では静かに幸福な時間が流れる
第３楽章　氷の上をゆっくり歩くが、ころんで氷が割れまた歩き出す　春の風が北風を追い出そうと激しく戦っている　冬は厳しいがそれもまた冬の喜びでもある

■ W. A. モーツァルト　ディヴェルティメント 第３番　KV 138

モーツァルトが 16 歳の時イタリア旅行から故郷ザルツブルクに戻り３曲のディヴェルティメント（KV 136, 137, 138）が作曲された。この旅行で音楽観や表現力が明らかに豊かさを増し、その成果が現れた傑作である。ディヴェルティメントは嬉遊曲と訳される様に自由な形式で、18 世紀後半に王侯貴族の食事や祝いの場などで演奏される音楽であった。このKV 138はシンプルに見えるが、かなりの精密さを持ち、彼がいかに音楽の才能に満ちた天才であったかということを物語っている。

第１楽章　（アレグロ）　快活に始まり若々しい生命感にあふれておりどこか愁いをたたえている
第２楽章（アンダンテ）非常に優雅でゆったりと穏やかな中で後半になると瞑想的な雰囲気が漂う
第３楽章（プレスト）　爽気で勢いのあるロンドは変化に富み楽しい語らいの時間は上品に終わる

■ O. レスピーギ　リュートのための古風な舞曲とアリア　第３組曲

リュートとはルネサンス時代に広く使われていた弦楽器で、弦をはじいて演奏する楽器である。16〜17 世紀のイタリアのリュート曲に楽想を得て第１組曲と第２組曲が管弦楽のために作曲された。一方弦楽合奏のために書かれたこの第３組曲は最も有名で、弦楽オーケストラにとって貴重なレパートリーであり演奏される機会も多い。全曲を通じて気品あふれる美しい旋律が感動的である。

第１曲（イタリアーナ）明るく流麗な旋律はどこか懐かしくピチカートはリュートを思わせる
第２曲（宮廷のアリア）聴く人の心に訴えかけるようなアリアや、明るく動きのある箇所が印象的
第３曲（シチリアーナ）叙情的なメロディはいろいろなゆかしい表情を持ち、この上なく美しい
第４曲（パッサカリア）重々しく始まるが活気ある緊張感を伴って即興的に展開され壮大に閉じる

（Y. S.）

プロフィール

■酒井睦雄　Mutsuo Sakai　指揮

桐朋学園高等学校音楽科を経て 1971 年桐朋学園大学卒業。指揮を斎藤秀雄、秋山和慶両氏に、クラリネットを北爪利世、二宮和子、F. フックス各氏に師事。1971 年より相愛オーケストラ指揮者、1977 年ザルツブルクにて O. スイトナー氏に師事。同年、東京にて S. チェリビダッケ氏のゼミナールに参加。2001 年には芦屋室内合奏団を率いてドイツのバンベルクにてバンベルク交響楽団団員とともにニューイヤーコンサート、ドレスデンにてフラウエン教会落成記念コンサート等を行い好評を博す。2005 年 第 19 回京都芸術祭音楽部門 京都府知事賞受賞。現在、相愛大学教授として音楽専門家の育成にあたる傍ら、1974 年より芦屋室内合奏団音楽監督、岐阜交響楽団常任指揮者、1990 年より高知室内管弦楽団指揮者をつとめる等、アマチュア合奏団の発展にも尽力している。

■吉田 南　Minami Yoshida　ヴァイオリン独奏

1998 年に生まれ、5 才から天理教音楽研究会弦楽教室でヴァイオリンを始める。2005 年「第 17 回子どものためのヴァイオリンコンクール」金賞。2009 年「第 63 回全日本学生音楽コンクール」大阪大会小学校の部第 3 位。2010 年台湾開催「世界クラシック 2010」日本代表に選出され、第1位。また「第 12 回関西弦楽コンクール」優秀賞及び審査員特別賞、第 24 回京都芸術祭「世界に翔く若き音楽家たち」に出演、京都芸術祭音楽奨励賞受賞、「第 64 回全日本学生音楽コンクール」大阪大会小学校の部第1位、同全国大会第1位、併せて東儀賞・兎束賞・音楽奨励賞受賞。2011 年「こども音楽コンクール」小学校重奏・合奏 2 部門において全国第1位に当たる文部科学大臣奨励賞受賞。同年初リサイタルを行う。これまでに大阪フィルハーモニー交響楽団・千里フィルハーモニア大阪等と協演。岡本智紗子氏、岩谷悠子氏に師事。現在天理中学校2年生。

■芦屋室内合奏団

音楽監督	:	酒井睦雄		団　長	:	青柳　良	
事 務 局	:	伊藤恵子	末松秀樹	会　計	:	堀田純子	
ヴァイオリン	:	青柳　良	浅野　忠	勝部　操		喜多智佐子	田島光子
	:	◎鳥丸安雄	藤本恭子	堀田純子		☆三村誠子	○吉岡道子
ヴィオラ	:	伊藤恵子	音村圭一郎	鈴木道子		○鈴木雄二	
チェロ	:	○鳥丸直子	堀田一之	宮崎晴夫			
コントラバス	:	末松秀樹					
チェンバロ	:	小津久子					

◎:コンサートマスター　☆:アシスタントコンサートミストレス　○:パートリーダ

「重い」と「走る」

どの世界でもその構成要員だけに通じる用語が存在する。この「重い」と「走る」もそのひとつだろう。世間一般の言い方に直せば「遅い」と「速い」となる。要するに合奏のあるパートが他のパートより遅くなったり、速くなったり、または各パート同士は合っていても指揮者の意図する速さに対してずれることを言う。こうなれば当然合奏はばらばらになって最悪の場合演奏が止まってしまう。遅い速いと言っても音符ひとつ当たり 100 分の数秒程度であり、指揮者から見ると遅い場合は足に重りが付いたように「重く」、速い場合は演奏が指揮より先に行ってしまい「走って」いるように感じられることからこのような表現になったものと思われる。

古典派以降現在のポピュラー音楽に至るホモフォニー（メロディとそれに合った和音の伴奏が並行する楽曲）の形式では、メロディを担当するパートは感情を込めて歌うように弾くためどうしても遅くなりがちである。これに対して伴奏を担当するパートはせわしく分散和音を弾いたり音符を刻むために速くなる傾向がある。練習では指揮者からよくこのような指摘を受ける。演奏者は自分の楽譜に気をとられるのでなく、よく指揮を見て他のパートを聞くことが求められる。(K.O.)

本年度は、スイスと日本を拠点に独奏、室内楽奏者としてご活躍されているコントラバスの白土文雄先生にも弦楽合奏の指導をして頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。